

# 平成24年度沖縄群島病害虫発生予報第2号(5月予報)

## I 5月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	50	20
平 年 並	40	30	30
低い(少ない)	20	20	50

(平成24年4月20日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	24.0	26.7	21.8	231.6	145.8

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

## II 5月の発生予報および防除上の注意事項

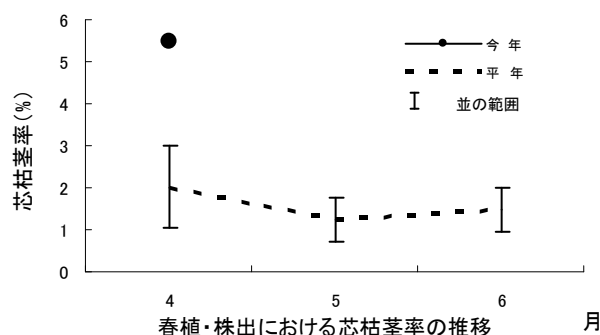
### 1 さとうきび

#### (1) メイチュウ類

発生程度 : 多

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、新植・株出圃場における芯枯茎率は5.5%(前年5.0%、平年2.0%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 植付時や培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号(平成24年4月5日付)参照。

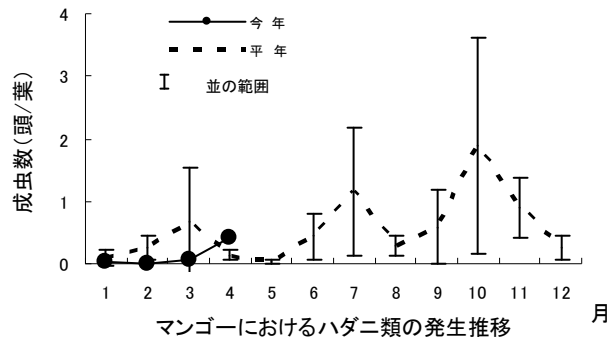
## 2 マンゴー

### (1) ハダニ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 4月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.4頭(前年0.4頭、平年0.1頭)と平年より多かった。
- b 発生していた種類はマンゴーツメハダニであった。



<防除上注意すべき事項>

- a 果実に寄生すると果皮がくすんだように白化する。
- b ハダニ類は多発すると防除が困難になるので早期発見・早期防除に努める。

### ○ 炭疽病の防除対策

- a 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、袋がけ前までの防除対策が重要である。
- b 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
- c 果実肥大期は、治療効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。

### ○ うどんこ病の防除対策

- a 4月下旬の調査の結果、一部園地において発生が確認された。
- b 罹病した部位はビニール袋に入れて、速やかに施設外に持ち出し処分する。
- c 通風採光をよくする。

### ○ チャノキイロアザミウマの防除対策

- a 着果期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見・早期防除に努める。
- b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
- c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

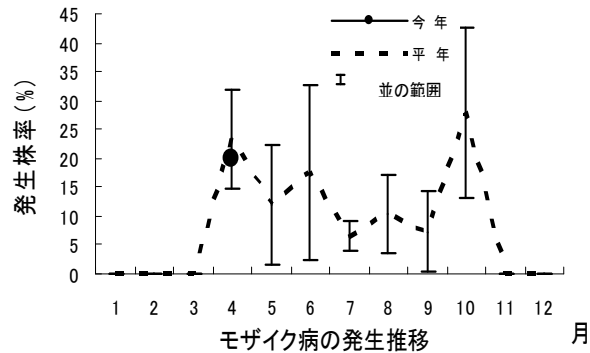
### 3 へちま

(1) モザイク病

発生程度 : 並

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病株率は20.0% (平年23.3%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

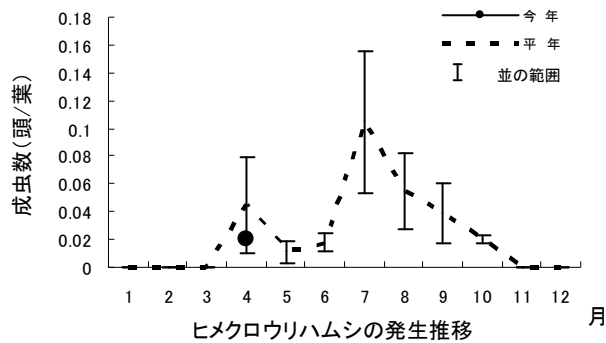
- a 発病株は抜き取り、処分する。
- b シルバーポリテープ等を利用して飛来を防止する。
- c 圃場周辺の雑草は、媒介虫であるアブラムシ類の発生源となるので除草する。

(2) ヒメクロウリハムシ

発生程度 : 並

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭未満(平年0.1頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a シルバーマルチを利用し、成虫の飛来防止に努める。
- b 成虫の食害および産卵防止のため、生育初期は寒冷紗やビニールで被覆する。
- c 定植時に粒剤を施用し、幼虫の発生を予防する。

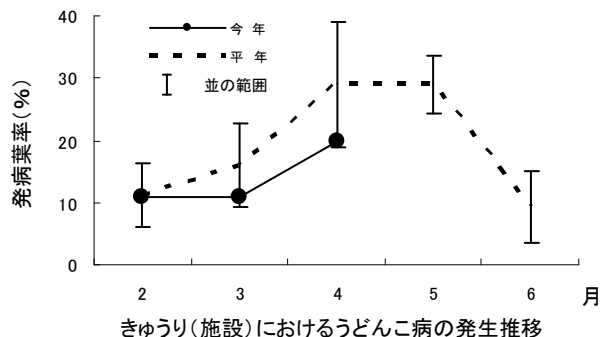
## 4 きゅうり(施設)

### (1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病葉率は19.8%(平年29.0%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

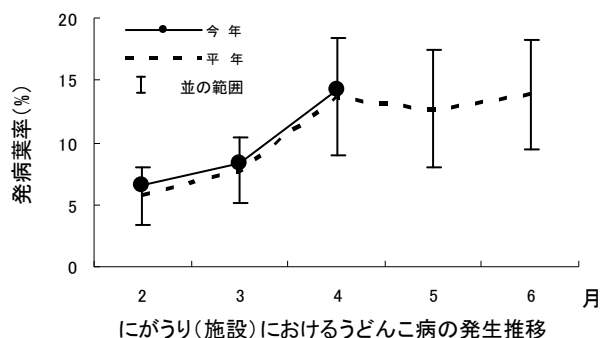
## 5 にがうり(施設)

### (1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病葉率は14.2%(前年19.5%、平年13.7%)と平年並であった。



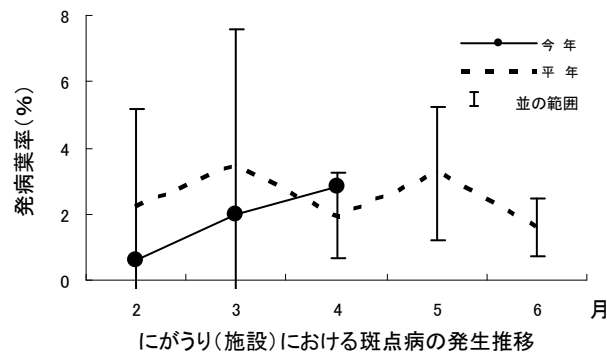
<防除上注意すべき事項>

- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(2) 斑点病

発生程度 : 並  
予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病葉率は2.8% (前年0.7%、平年1.9%)と平年並であった。



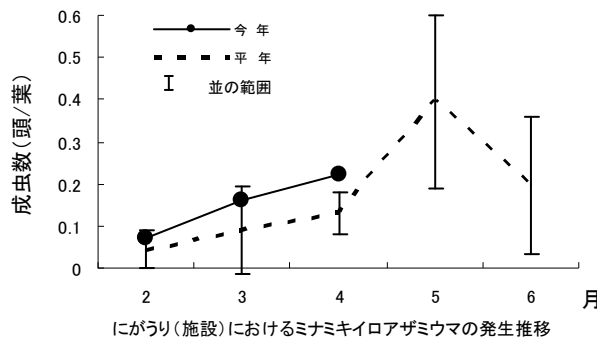
<防除上注意すべき事項>

- 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- 急激に症状が拡大するので中～下位葉をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

(3) ミナミキイロアザミウマ

発生程度 : やや多  
予報の根拠

4月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.22頭 (前年0.12頭、平年0.13頭)と平年よりやや多かった。



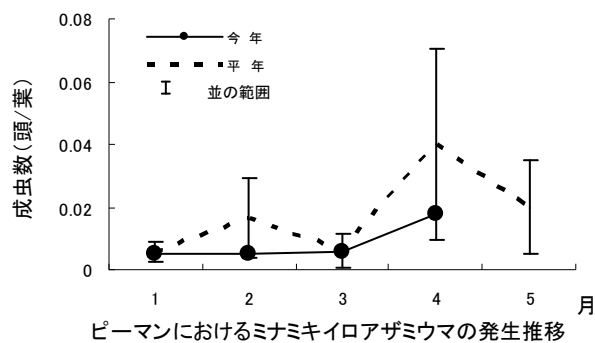
<防除上注意すべき事項>

- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- 施設の出入口、天窓、側窓にはネット資材等を張り成虫の飛来侵入を防ぐ。
- 摘葉等による残渣は本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

## 6 ピーマン

- (1) ミナミキイロアザミウマ  
発生程度：並  
予報の根拠

- a 4月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.02頭(平年0.04頭)と平年並だった。  
b 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は平年並または高い確率が共に40%と予想されており、今後の気温上昇に伴い発生が助長されると考えられる。



### <防除上注意すべき事項>

- a 本虫はウイルス病の媒介虫であるので、発生には注意する。  
b 施設の出入口、天窓、側窓にはネット資材等を張り成虫の飛来侵入を防ぐ。  
c 摘葉等による残渣は本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。  
d 栽培終了後に蒸しこみ処理を行い、施設外への分散を防止する。